内村鑑三：その預言者的な側面についての一考察

本多峰子

内村鑑三は、日本とキリスト教、日本におけるキリスト教の受容のあり方を生涯考え続けたキリスト教徒思想家のひとりである。日本におけるキリスト教受容の問題と取り組み続けた作家としては遠藤周作などもいるが、内村鑑三と遠藤周作など昭和後期の作家を比較して見ると、われわれは、本質的な問題意識の相違に気づかされる。遠藤周作は——他的代表的な昭和のキリスト教作家である三浦絢子などにも言えることであるが、——信仰の問題を個人の問題として扱っており、個々の人間の救いや信仰の可能性が問題となっている。そして、焦点は個人の内面に当てられる場合が多い。たとえば、遠藤周作にとってのひとつの大きな問題は、日本的精神土壌として西洋の〈神なる神〉を理解されにくいということであったが、その問題を扱った彼の代表作『沈黙』を見たい。この、長崎のキリスト者迫害の史実に基づいた小説の有名な箇所で、転び司祭フェレイラは、次のように言っている。

「聖ザビエル師が教えられたデウスという言葉も日本人たちは勝手に大日と呼ぶ信仰に変えていたのだ。[……]デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして他のものを作り上げはじめたのだ。[……]基督教の神は日本人の心情の中で、いつか神としての実体を失っていった。

「彼らが信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日まで神の概念は持たなかったし、これからももたないだろう。

[……] 日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力を持っていない。日本
内村鑑三：その預言者の側面についての一考察

人は人間を美化したり拡張したものを神と呼ぶ。人間と同じ存在を持つものを神と呼ぶ。だがそれは教会の神ではない。

ここで、遠藤は、日本人一般の神概念と信仰の問題を扱っているようにも見えるが、彼の小説を通して読めば、そうした精神土壌の中で取り上げられるのは、個々の人々（沈黙の場合には転んだ信者キチジローと、イエズス会司祭ロドリゴである）の救いと信仰の問題であると分かる。それに対して、内村鑑三の場合には、おそらく、彼が生きた時代が日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦など、大きな戦争を含む日本の社会の動乱と危機の時代であったことが大きな理由のひとつであろうが、国家としてのキリスト教に対するあり方、国単位の信仰の問題が語られている。これは、旧約の預言者たちが、国としての神への立ち返りを訴えた態度と通じるものがある。本論では、国家に対してキリスト教的立場から声を上げた者としての内村鑑三の預言者の側面を考察し、彼が日本におけるキリスト教受容の問題をどのように見ていたかを考えてみたい。

＊　＊　＊

日露戦争の前年に、明治36年2月10日に内村は、「失望と希望」という論を公にして、その中で、「私共に取らなければならない愛すべき名とては天上天下唯一つあるのみであります、其一つはイエスでありまして、その他者は日本であります、これを英語で言いますば其第一はJesusであります、其第二はJapanであります。[・・・・]私はこれを稱してTwo J'sすなわち二つのジェーの字と申します」と言っている。この論説で彼は、自分たちがキリスト教を信じた第一の理由は、それが日本を救う唯一の力であると信じたからであると述べ、聖書に記された罪悪で、日本に無いものはないと、日本の現状を弾劾する。苛合、汚穢、好色、偶像に仕えること、巫術、仇恨、妒忌、忿怒、紛争、結党、異端、娼妓、兇殺、醉酒、放蕩が横行し、数万の民が餓えている一方で、彼らを飢餓に至らしめた者たちは、奢侈淫逸に日を送っている。正義を求める声は、不平の声であり、義を愛する声ではない。政府も腐っている。こうした状態で、希望はどこにあるか？と、彼は問題を提示し、次のように
訴えている。

１）希望は、第一に神の本性にある。神は正義の神、仁愛の神であるから、その神の造った日本は、いつまでも不義の器となって残るはずがない。

２）第二の希望は、人民にある。2000年の歴史の名誉は、その進歩的、自由的なる点にある。日本人は善を採用する機会さえあれば、その都度採用していった（たとえば、支那の文字、仏教、天皇制以外の、北条氏による政治体制などである）。日本人は、島国の民ではあるが、島国を以て満足するものではない。その企図は常に「大陸的であり世界的であり」、機会があれば常に世界に伸びようとしてきたのである。日本人は、聖徳太子、空海上人、日蓮上人、北条泰時、蓮如上人、豊臣秀吉、紙屋五兵衛、渡辺翠山らを輩出したことからも分かるように、世界に大事業をなす資格を備えた人種であると、彼は言う。「彼らは終には世界の最善最美的ものを我が有となさずには止みません」3）と、言うのである。

３）第3の希望は国土にあると、内村は言う。日本は世界の半分の西の半分と結びつける天職を帯びている。日本は亜細亜の門であり、日本によらねば、支那も朝鮮もインドもペルシャもトルコも救われない。「日本国は支那の四億四千万とインドの二億五千四百万とその他大陸の億兆を救ふために造られたものであります […]」世界は日本国に向けて革命を要求して居ます […]日本国は遠からずして世界の大光を迎えへます、日本国も久しからずして匈牙利と同じく黄色人種の基督教国となります」4）。

このように、内村は論じているのだが、ここには、旧約聖書の預言者が、イスラエルの民の不義、不正、背信や社会不義を弾劾し、神への立ち返りを求める態度と共通するものがある。ホセアは、国に「誠実さも慈しみも、神を知ることもない […]呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫がはびこり、流血に流血が続いている」（ホセア 4:1-2）ことを弾劾した。アモスは、不正な商人を「貧しい者を踏みつけ、苦しむ農民を押さえつける者たち」として訴える神の言葉を取り次ぎ、彼らが「エファシは小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を用いてごまかそう。弱い者を金で、
内村鑑三：その預言者的研究についての一考察

貧しい者は靴足一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう」（アモス 8:4-7）と、
貧しい者たちから搾取し、ますます貧富の差を広げてゆく社会不正を弾劾している。
しかし、その一方で、アモスが戒きの後の神による再興の預言で結んだように、内
村も、神の正義と愛が救いの希望であることを第一に述べている。すなわち、アモ
スは神の言葉として、「わたしは、わが民イスラエルの繁栄を回復する。彼らは荒
された町を建て直して住み、ぶどう畑を作って、ぶどう酒を飲み、園を造って、実
りを食べる。わたしは彼らをその土地に植え付ける。わたしが与えた地から、再び
彼らが引き抜かれることは決してないと、あなたの神なる主は言われる」（9:14-15）
と預言しているが、これは、内村の言うような、自己の被造物に対する神の正義と
愛による預言であろう。イザヤ、エレミヤにもまた、民の不正や背信に対する弾劾
と（イザヤ 1:2-5, 1:21-24, 10:1-2, エレミヤ 7:9-10）など救いの預言とが（イ
ある。イスラエルでの預言者としての存在は、民と神との間に立ち、神の審判と告
発を民に告げ、民に対して神への立ち返りを促すと同時に、立ち返った民への神の
慈しみの約束をも伝え、希望を与えるものであった。ここでの内村の言説はその性
質を持っている。しかし、その一方で、内村が日本の希望の根拠として、神だけでなく
、その地理的特色と民族的特色を挙げ、日本が「世界の最善最美のものを我
が有となさずには」いないと思い切ったこと、そして、日本によらなければアジア
の救いはない、と言ったことは、日露戦争を控え、日本が他国への侵略の手を伸ばし
てゆこうとする時勢にあっては、その軍事的国粋主義的侵略を肯定する危険があっ
たことは否めないであろう。確かに、上記の文脈では日本による救い、というのも、
日本がハングリーのようなキリスト教国になることによって、キリスト教を伝播し、
その結果救いをもたらすということに読めるが、その文脈から切り離して読まれて
しまえば、あるいは、その文脈が十分に理解されなければ（そして、その可能性も
あるだろう）、危険な文章であったと思われる。

しかし、この時点で内村は、決して戦争を肯定するものではなかった。「失望と
希望」を書いた前年の明治35年にも、内村は、「日本国の大罪悪」という論説で、

(4)
内村鑑三：その預言者の側面についての一考察

日本が、南アフリカの二つの小共和国が廃滅に瀕した時に、その敵国である英国と同盟してその絶滅を早めた、と政府の行動を弾劾している。そこで彼は、もし人が弱者の命を賭して自己の利益を図るならば、その人は人面獣と呼ばれるであろう、しかし、日本は国としてそのようなことをしていた。昔エドムがユダの敵国であるパビロンと同盟してユダの滅亡を助けたことに憤ったオバヤヤが、エドムを呪ってその滅亡を預言したが、エドムと同じ運命を日本のもにも下す、天の怒怒を怖れる5）、との旨を述べており、特に、弱小国に対する侵略的行為には反対の姿勢を明らかにしている。現在と異なり、政府に向かって赤裸々な批判をする事は安全とはいかなかったであろうから、ここでも、内村の言動は国家に対する弾劾者、批判者としての預言者の性格を帯びている。そして、ここからも分かるように、内村は、決して日本が戦争による侵略国家となることに賛成はなかった。

日本が地理的によい場所にあり、日本よろねばアジアの救いはないと内村が考えたのは、日本が西洋と東洋の橋渡しに適しているという認識からである。内村は、さかのぼって明治25年に「日本国の天職」（明治25年4月15日）という文章6）を公にしているが、そこで、三つの問いをたて、それに答えつつ、日本と信仰の問題を次のように考えている。

神と国のために尽くすには次の三つの問いを考えねばならない。

１）人間終局の目的は何か

２）自国の天職は何か

３）自己の天職は何か

そうして、彼は、この三つの問いに、以下のように答える。

１）について言えば、人間の終局目的は、神の栄光を表し神の愛に裕すことにある。（ウェストミンスター信仰箇条）。（神のため、を正義、慈悲、善行などと考えると分かりやすいかも知れない。）

３）については、他人の天職ではなく、自己の天職を知り、それに従事することが重要である。それが、他人のためにも国のためにもなる。

２）国も、集合体であり、国民にも天職がある。自国をもって万国の中華と考
える国や、自国の強大のみを求める国は、永久の富強に達することがない。日本国の大興は以下の点から考えられる。

＜地理学上の位置・形状＞
1）島国であり、商業、航海に適している。
2）陸半球の周囲線に在るので、外交上の煩雑を免れ、他国の侵害を受けにくく、平和を保つに適している。
3）南北に走る山脈を持ち、その山脈が適度に各地の自治を促し、しかもギリシア・スイスのように険しい山ではないので、土地を完全に切り離さず国民協同も促す。
4）米国、カナダ太平洋岸と朝鮮、支那との両方に向かって港湾を持ち、東洋と西洋の中間に立つ飛行（ステップストン）、キリスト教的米国と仏教的アジアの媒酌人の位置にある。

＜日本民族の兆候＞
善良なる航海者である。武功においては恥じるところはないが、武力で文明世界に立とうとすることには自分（内村）は同意できない。日本人は他国の文明を吸収することに秀で、東洋国民中唯一欧米の文明を了解し、文明国中唯一東洋の思想を有する。

＜歴史上的兆候＞
米国経由で入ってきた欧米の文明と、インド、チベット、支那経由で入ってきた文明との、思想界の二流が日本で出会っている。

＜結論＞
結論として、内村は、日本は東西両岸の仲裁人としての役割を果たすことが出来る、と言う。機械的新文明の欧米をアジアに紹介し、西洋の法律、宗教、政治などに対しては、これらを東洋在来の空気を持って養成し、西洋諸国が利用することのできるようにする。「米が日本に於て製出する新文明は欧米の旧文明を改良するに当たって著しき効力あることは余輩の疑はざる所なり、汝旭日帝国よ汝の光線を東西に放ち東の方欧米に反射し西の方亜細亜を照し以て汝の
天職を満たせ”)と、内村は訴えている。

以上のように、内村が日本を東洋の救済者の立場で見ていることは、侵略とは無関係であり、むしろ早い時期から、彼は日本を東西の「仲介者」「仲裁人」として考えていたわけである。ただ彼が日清戦争の折に義戦論を書いたことは知られており、後に彼はそれを誤りと認めているが、その義戦論と、その後の非戦論の論理は見ておくに値する。

問題の義戦論は、内村が『国民之友』（明治27年9月3日号）に書いた、「日清戦争の義」という戦争擁護論である。その主旨は、歴史には義戦があった。たとえば、旧約聖書にはイスラエルの士師ギデオンがギディアン人を迎え殺戮した戦いが記録されているが、それがその例である。日清戦争は、義戦である。なぜなら、この戦争は、我らが好んだものではないが、支那は社交律を破壊し、人情の害敵であり、野蛮主義の保護者なので「正罰」を免れないからである。日本が朝鮮に干渉するのも、干渉自体は悪事ではなく、朝鮮出兵は、明治18年の天津条約に従ったものであり、豊島近海で日清どちらが先に発砲したかは明らかではないが、自分（内村）としては、清が先と信じ、いずれにしろ、どちらが戦争を避けようとしていたかが問題である。日本は「進歩主義の戦士」であり、日本と進歩との両方にとって大敵なる支那と戦っているのである(5)、というものであった。ここには、戦争を正当化するための典型的な理論、すなわち、相手国は自国にとってのみでなく正義と平和と世界にとっての害であり、悪であり、正統な罰を下されるべきである。それに対し、自分は世界の認めたい善を生産する（ここでは「進歩」）ものであり、世界がその勝利を願うであろう、というような理論である。他ではキリスト者として書いている内村が、ここでは信仰に基づいてではなく（むしろここでは、聖書——ギデオンの話など——は、自説の正当化の為の例証に用いられている感がある）、進歩国の代表としての日本の代弁者として語っているのが気づかれる。まさに彼が自分にとっては大切な二つのJがある、と述べ、日本とイエスを同等に扱っているような発言をしていることに特徴的に伺われるように、彼においては、時に日本の利害についての関心がキリスト教徒としての信念に先立つことがあるかのような印
象さえ受ける。また、内村の生きた時代の為であろうが、今日のおそらく大部分のキリスト者と比べてはるかに強く、日本という国家を有機的に、集団としてよりもむしろ個体として考えていたことが彼に特徴的である。

内村が、「日清戦争の義」を誤った論文と表明している「時勢の観察」は、戦後明治29年に同じ『國民之友』誌にすでに公にされているが、この、義戦論への反省は、明治37年、日露戦争勃発年の「世が非戦論者となりし由来」に以下のように展開されている。ただしこれは、「日清戦争の義」が『國民之友』に掲載されたのと異なり、主としてキリスト者に向けられた『聖書之研究』に発表されている。彼は、自分が非戦論者となった理由を次のように四点あげている。

1. 聖書研究を続けるに従って、十字架の福音がある限り、あらゆる戦争は避けるべき、正しからざるものと見るに至った。

2. 個人的経験として、34年前、ある人に攻撃された時に無抵抗主義を取った結果、心に平安を得たことから、無抵抗主義の利益を実体験した。

3. 過去の歴史を見て、日清戦争の結果、戦争は害あって利がないと知った。日清戦争の目的であった朝鮮独立はかえって危うくなり、戦勝国である日本の道徳は腐敗し、敵国を征服しても、国内の治安は守れていない。米国も、米西戦争の結果、自由国から陥没国に墮落した。その他、英仏戦争でも、そのようなことが言える。

4. 米国マサチューセッツ州発行の The Springfield Republican という平和主義の新聞の感化による。

このように彼は挙げている。2の実体験は34年前とあるから、義戦論を書いた時はすでにこの体験はなされていたわけである。それゆえ、彼を非戦論者にしたのは、戦争の悪影響を実感した経験が大きかったことは明らかであるが、ここで彼は、十字架の福音を語るキリスト教徒である限り、非戦論を採らざるにはいかならないことに気づく、その通りに訴えている。そして、日露戦争の折には終戦非戦論の立場を取ったのである。それが、信仰の上で義しいことであり、それが即、究極的には日本という国家のためにもなるとの信念で政府の方針に反対する声を上げたことは、

（8）
内村鑑三：その預言者の側面についての一考察

旧約のエレミヤなどの非戦論の状況を通じるものがある。（エレミヤ21:8-10など）。
内村がすでに1891年に、教育勧誘に対するいわゆる「不敬事件」を起こしていた
ことなどを考えると、彼が決して国家権力に対するおもねりで「義戦論」を書いた
のではないことは明らかである。

日本人のために信じる

先に見た「失望と希望」（明治36）で内村は、自分たちがキリスト教を信じた第
一の理由は、それが日本を救う唯一の力であると信じたからであると、述べている。
ここからも分かるように、彼にとって、キリスト教は個人の救いであるのみではなく,
国家の救い手であった。そして、その国家は、日本人の総体、と言うよりも、
どこか有機的な個としての「日本国」といったものとしてとらえられているように
見える。彼は明治32年に「日本国と日本人」という論を書いているが、そこにその
ことが特によく伺われる。そこで彼は、「余輩は日本国の為に日本人を愛するを得
べし、日本人の為に日本国を愛する能はず、日本国は或る明瞭なる理想と天職
を帯びて存在するネーション（国家と訳すべきからず）にして純情無垢の処女のごと
き者なり」と言っている。

彼によれば、日本国に反して、日本人なるものは、様々な民族の子孫の結合体で
あり、その目的は卑賤で日本国の理想に及ばず、略奪を愛し、虚名を好み、仁義を
衒い、強者に媚びて弱者を圧する。彼らを愛することは出来ない。しかし、それで
も、日本人は天の許可を得てこの美しい国に住んでいる民であるから、ついにはそ
の理想に教化されずにはいられないであろう。そこで、内村は、故国への愛に励ま
されて、日本人に耐え、彼らを愛するのである、と言っている。

それは、国家で

ない日本、と日本人とを分け、その日本という国を、一つの有機体のように考え,
一国民として見てその救いを考える態度である。この点で、内村の姿勢は、かつて
の預言者が個々の人ではなく「イスラエル」全体に、あたかもそれが一つの集合人
格であるかのように呼びかけていた態度と一貫する。内村自身、自伝で、自分がエ
レミヤ書を始めとする預言書に多大な影響を受けていることを認め、「私は、いかにして自分の魂を救うかについては、キリストと彼の使徒たちから学び、いかにして祖国を救うかについては、預言者たちから学んだのである」[13]と述べている。

国家の危機と信仰とを結び付ける考えは、現代の日本にはまれであるが、イスラエルの預言者にはそれが基本的なことであった。そして、内村も、彼ら預言者と通じる、以下のような発言をしている。「政治問題は畢竟するに経済問題なり、経済問題は毕竟するに道德問題なり、而して道德問題は毕竟するに宗教問題なり、国の政治問題は毕竟するに国民の信仰如何によって解決せらる」[14]。国家の危険として、信仰の油が絶えていることよりも大きなことはない。

国家体制に対する宗教的立場からの警告は明治36年3月10日に『聖書之研究』35号に掲載された「日本国の大困難」に表明されている。内村はそこで、日本国の大困難、最大困難は、「日本人が基督教を採用せずして基督教的文明を採用したこと」[15]であると、訴えている。一神教の信仰と科学の勃興との間には深い関係がある。また、フレーベルやヘルベルトの教育法も基督教の信仰に立つ。日本が採用した西洋の憲法が唱える自由も、ナザレ人イエスキリストによって初めて唱えられた自由である。人権も同様である。権利とは、責任に付着した力であり、人の責任とは、「神と万有と人に対する彼の心霊上の関係より来る」と彼は指摘する[16]。神と不滅の霊魂の実在を認めなければ、責任の観念は土台から覆され、結果として人は、知能を備えた利欲の動物になってしまう。責任の観念は実に、宗教的観念であり、責任の観念を維持しようとするとなる、宗教の力に頼らなければならない。しかし、日本人は、基礎にあるキリスト教を受け入れずに、憲法、法律、教育制度のみ西洋に習って制定した。結果、科学も、利益の為になされるだけで、真理に対する愛が無い為に大発見や大進歩は見られない。教育では、神の名を削って天皇陛下の名を加え、ヘルベルト主義の教育学などと言っている。これは、天然（＝自然）が赦さない欺詐の罪である。憲法には権利自由が保障されているが、日本では、代議制においても自由ではなく情事や脅迫、誘惑によってことが決まり、政治は、すべて利益から割り出される。キリスト教なしの代議制は、異常であり、霊魂のない核である。
内村鑑三: その予言者の側面についての一考察

「基督教なしの基督教的文明は是は之れ終には日本国を滅すもの」であり、支那、トルコ、モロッコのように文明が宗教に合っている国はまだ良いが、日本は、宗教が東洋的で文明は西洋なので困難なのである。西洋文明を捨てられない今は「西洋文明の真髄なる基督教其物を採用するのみ」であると、彼は訴えている。

また、大正3年10日に発表された「日本人とキリスト」でも、「西洋文明の精神的根拠のキリストの福音にあるは世界の御論である、然るに日本人は西洋文明の外殻を採用するに汲々として其核実は全然之を斥けたのである、時かね種は生えぬ、日本人は国家としてきた国民として生命の主なるイエスキリストを嫌悪排斥して自己に大なる損害を招いたのである」と、同様の訴えをしている。

ここで、内村が日本におけるキリスト教の受容を、どのようなものであるべきと考えていたかを見ておきたい。

内村は、「我が理想のキリスト教」という論で、

日本国は独立国である。独立国である以上は其財政に於ては勿論其兵備に於て、其教育に於て、其教育に於て其総てのことく於て独立でなくてはならない、然るに国民の精神たるべき其基督教丈けが外国人に依頼しなければならぬとなならば日本国は其最も深淵なる意味において独立国ではないのである、肉体は独立でも精神に於て依頼する人は奴隷である、制度文物に於ては独立でも宗教に於て依頼する国は亡国である。

と述べ、まず、日本国の独立を訴える。彼は、現在の宣教師は英、米、仏、独、露など、諸強国から来るが、物質的に強大な国民は宣教師を造り、送るのに最も不適当な国民であると考える。それは、強国が宣教師を利用して他国を略奪するからというのではない。外国人宣教師の多くは高尚な目的を持って人間の救済に従事してはいるのだろうが、彼らも国家の保護の元にいる以上、その影響を受けざるを得な
内村鑑三：その預言的側面についての一考察

いからである。「最も善き宣教師とは神の他に何も傾る所のない者である」20) と、内
村は言う。それゆえ続けて彼は、「外国宣教師より独立」しても、そのキリスト教
の根本原理から独立してはならないと、訴えている。我らのキリスト教はどこまでも
福音的でなければならない。儒教的キリスト教であるとか、仏教的キリスト教で
あるとかいうものは決してキリストのキリスト教ではない。キリスト教は絶対的宗教
である。これは他の宗教と混合して成立するものではない。「外国宣教師の補助
を絶ちし吾等は如何なる名義の下にも仏教の僧侶や神道の神主の補助をうけてはな
らない」21) と、彼は言うのである。

つまり、内村にとっては、外国の影響下から出ることは日本の宗教概念を取り込
んでキリスト教を日本的ににする、というような意味ではなかった。ここで、われわ
れは、遠藤周作などとの興味深い対比を見ることが出来る。遠藤の母親は熱心なカ
トリック教徒であった。その望みで、遠藤も少年のころ洗礼を受けたが、西洋のキ
リスト教が何か縁遠い、自分に合わないお仕着せの信仰であるような感じをぬぐい
去ることはできなかった。けれどもだからといって、キリスト教を捨てることもで
きなかったのである。後に彼は次のように書いている。

だがその時さえ、私はその洋服を結局はぬぎ棄てられなかった。私には愛
するものが私のためにくれた服を自分に確信と自信がもてる前に脱ぎ捨てるこ
とはとても出来なかった。それが少年時代から青年時代にかけて私をともかく
支えた一つの柱となった。

後になって私はもう脱こうとは思うまいと決心をした。私はこの洋服を自分
に合わせる和服にしようと思ったのである。それは人間はたくさんので生涯
きることは出来ず、一つのことを生涯、生きるべきだと知ったからである22)。

冒頭で見たように、遠藤は、日本人はその古来の宗教観のために、人間を超絶した
キリスト教の神を考える能力を持たず、キリスト教の神もいつしか大日如来のよう
なイメージに作り変えてしまうと感じていた。日本人の考える神のイメージは母な

(12)
内村鑑三：その預言者の側面についての一考察

る神のそれであり、遠藤はあえてその神のイメージで神を描いたのである。そして、彼の描くイエスもその、母的なやさしさが特徴的である。それは、彼が＜日本人である私＞としてふれたイエス像であると意識されている一方、遠藤はそうしたイエス像が正統派の視点から見れば、不满なものであることを承知していた23）。

しかし、内村が日本的キリスト教と言ったときには、それは、遠藤が考えたような日本的宗教土壌で変質したキリスト教のことではない。むしろ、これは、最初の宣教師依存から独立した日本のキリスト教、というような概念に近いであろう。

日本のキリスト教は最初、外国からのミッションに頼っていた。しかし、沢山保羅の「日本教会自給論」（明治16年）のころから、経済力、伝道力、政治力を外国のミッションに依存せず、神のみに信頼するあり方を提唱する意見が出てきたと認識されている。この動きは日本のナショナリズムの感情とも合っているが、国粹主義ではなく、日本の国家権力からも独立し、神の恩恵にのみ信頼しようとする運動であった24）。

内村の「日本のキリスト教」という概念も、この流れの中で捉えることが自然であろう。彼は、日本人は、政府の勧誘や外国宣教師によって信じるのではなく、「自由に自由宗教を信じ[……]自身勝手にナザレのイエスを主として仰ぎつつ」25）あると言う。そうした日本のキリスト教徒が、この国を永久の基礎の上に据え、西洋と東洋をつなぐ者となれるだろうと彼は考えている。その他、彼は、

「伝道の新紀元はまさに開かれんとす、今や外国宣教師の勧誘と慈善とに由らずして、日本人自身が直に起きてキリストを迎えつ」26）との言葉や、

「日本国は外国宣教師の憚りによって救はれざるべし、日本人自身の聖化された高貴なる愛国心によって救はるべし」27）などの声明を出しており、日本のキリスト教の独立を強く訴えていた。ここで、「日本人自身の聖化された高貴なる愛国心によって」などの文言は、国粹主義の方向に向かう時代には特に危険となりうるが、宣教師からの独立は、外国によってキリスト教の伝播を受けたいずれの国にも普遍的な課題であり、日本もその例外ではなかった。

内村が、日本は他の国の宣教師によって信じるべきではない、と考えた理由には、

(13)
ナショナリズムなどとは別に、内村自身の信仰体験があると見られる。

彼は1886年9月13日の日記に、「ちょうど夕食に出かけようとした時だった、肉に死んでいれば、悪魔も私を攻撃できないという考えが浮かんだ。この「罪に死ぬ」ことは、わが罪深い心を見つめることによってではなく、十字架につけられたイエスを見上げることによって完成されるのだ。私を愛したまうキリストによって、私は勝利者以上の者となるのである。[……] 感謝は心にあふれ、主の晩餐にあずかりることによってこの日を記念しようと思い立った。そこで一斉の野ぶどうをつみ、それから少量の果汁をしばりとって、小さな陶器の皿に入れ、またビスケットの小片を割った。[……] その前にすわった。感謝と祈りをききあげてから、限りない感謝の心で、主の体と血をいただいた。なんという浄化。生きている間、何度も、何度も、これを繰り返し行わなくてはならない」291と書いている。内村は、このような直接の福音体験をもっており、このような個人的な聖餐が冒渉のそしりを受けるであろうことも承知しながら、やはりその有効性を信じている。神、あるいは聖なるものの直接体験は旧約預言者のひとつつの特徴であるが、内村にもそれに通じる体験があったと言って、言い過ぎであろうか。

彼は、「政府を聴く勿れ、神を聴よ、政党を聴く勿れ、神を聴よ、教会を聴る勿れ、神を聴よ、教師と政治家を聴く勿れ、神を聴よ、そばかは人より何の善事は来らず、すべての善事は神より来ればなり」291と言っている。これは、彼の根拠に神と自分との直接的体験に基づく信仰があり、そうした信仰は宣教師による教えを不要とし、それに勝る、ということであろう。内村の無教会主義も、そうした直接の信仰体験を通じるものである。つまり、教会を含めて組織的なものはその体験に取って代わることは出来ないということであろう。そして彼は、外人の宣教師に関しても、そうした者たちによるキリスト教の輸入ではなく、日本人が日本人の心で出会ったキリストを信じる道をよしとするのである。

内村が、自己の信仰体験を土台とする信仰をいかに重視していたかは、「信仰」（大正3年10月10日）という、彼の以下の文にも明らかである。

(14)
信仰は信念ではない、実験である、実物の実得である。神は思想ではない、実在者である、キリストは理想ではない、活ける救い主である、霊的実在者を霊的に感得すること、其事が信仰である、恐のごとくにして、信仰は迷信でないのは勿論のこと、思索でない、惑より智性のことではない、霊性の事である、信仰は自己の中心の実験であって最も確実なる事である。30)

また、彼がそうした信仰体験を、自分個人の特殊な経験と考えず、日本人それぞれに開かれたものと考えていたことは、以下に文により明確に示されている。

日本的キリスト教と称ふは日本に特別なる基督教ではない、日本の基督教とは日本人が外国の仲人を経ずしてじかに神より受けたる基督教である、爾の何たるは一目瞭然である、この意味に於て独逸的基督教がある、英国的基督教がある、蘇国の基督教がある、其の他各国の基督教がある、而かしてまたこの意味に於て日本の基督教がなくてはならない、[……] 日本魂が全能者の気息に触れる所に、其所に日本的基督教がある、この基督教は自由である、独立である、独創的である、生産的である、真の基督教は凡て斯くあらねばならない、未だ誰も他人の信仰に由て救はれし人あるにし、而して又他の宗教に由て救はる者ある可らずである、米国の宗教も英国の信仰も、縦し其最善の者たりと雖も日本を救ふことはできない、日本の基督教のみ能く日本と日本人を救ふ事が出来る。31)

日本の基督教と称して勿論基督教を変へて日本人の宗教と化した者ではない、日本人独特の見地よりして基督教の真理を闡明したる者である。キリスト教は世界的宗教なるが故に、各国民の寄贈貢献を待って初めて完全に世に顕はる者である。日本人を通して顕はれるたる基督教、それが日本の基督教である。32)

内村は、キリスト教徒以外の人々に向けては、キリスト教を西洋文化の移入とと
内村鑑三：その預言者側面についての一考察

もに必ず受け入れなければならない西洋文化の核として主張している。大正12年3月10〜7月10日、「日本の国体と基督教：ある高位高官の人たちにこの問題を提出されたとして私は大略左の如くに答へるであろう」（『聖書之研究』275〜276号）という論説で、彼は「基督教は日本の国体と相反せずとは日本国の政府が其の国民並びに全世界に向って弁明すべき者であると思います。[……] 御承知の通り基督教は所謂文明世界の宗教でありまして、之に反する事は全世界に反する事になります」と、言っている。

この主張と、日本のキリスト教は西洋的キリスト教ではなく、日本人のキリスト教であるべきだという主張は、一見矛盾するように見える。しかし、21世紀の現代の世界のキリスト教を見ると、それが必ずしもそうではないことが例証されているように思われる。西洋文化の核ともなったキリスト教は、もともとは地中海地方の宗教であった。その本質に基づいて西洋文明も、西方キリスト教も育った。しかし、同じ本質から、他の地域では東方正教会や、現代の韓国やアフリカのキリスト教が育っている。それは、内村の考える、その国民持分の見地から捉えられたキリスト教の例であろう。内村の訴えが、今、地球の各地で土着のキリスト教として実現していることは、以下などの、アリストター・マクグラスの指摘する21世紀のキリスト教の姿に明らかであろう。

21世紀のはじめまでに、キリスト教は世界宗教になっていた。キリスト教は真の意味で西洋の宗教だったことはない。その起源は、パレスチナにあり、その未来は圧倒的に南アメリカやアジアやアフリカにある。キリスト教は、中世と近代初期に西ヨーロッパでかなりの影響力を持ち、今でも西洋の文化を形成するうえで大きな意味を持っている。けれども、これは今では、キリスト教の複雑な発展段階の、広範ではあるが一時的な相にすぎないと見られるようになってしまっている。キリスト教の歴史的根源と未来の繁栄は他の場所にある。20世紀の最後の10年間での最も劇的な展開は、西洋の既存の宗教の内部の者たちが、彼らは伝統的に、自分たちが信仰の震央だと考えていたキリスト教の数的
な重心は今や展逓途上国にあると気付いてきたことである。

ここには、すでに韓国やサハラ以南のアフリカの場合に見た様式がある。も
ともとはヨーロッパ人や北アメリカ人たちによって植え付けられた宗教が、地
元の指導者たちに引き継がれ、新しい形で繁栄している。成長の最初の段階は
ヨーロッパや北アメリカの人々に促され、支えられていたかも知れない。けれ
ども、それは過去のことである。今あるのは、これらの地域に土着した形のキ
リスト教であり、原住民が指導者となり、この土地で考え抜かれた福音理解を
もっている。キリスト教の伝播集中化は、かなり進んでいるのである。

このようなことを考えると、内村はこの点でも、福音のあり方を予言した一個の預
言者的人物と考えられる。キリスト教では、使徒の時代から現在への伝統の継承と
いうものが重要であるから、この、土着のキリスト教についての是非は簡単に論じ
ることはできず、本論の範囲を超える。しかし、内村の考えた構想が今21世紀に世
界のさまざまな地域で現実になっているということは意味深いことに思われる。

注
2) 内村鑑三「す望と希望」(日本国の先途) (明治36年2月10日『聖書之研究』33号)，『内村鑑三全集』11
巻 (岩波書店，1981)，p. 49.
3) 内村鑑三「失望と希望」，p. 57.
4) 内村鑑三「失望と希望」，p. 58.
5) 「日本国の大罪惡」 (明治35年6月6日『万朝報』初出)『内村鑑三全集』10巻 (岩波書店，1981)，pp. 185
-185.
7) 内村鑑三「日本国の天職」，p. 294.
8) 内村鑑三「日清戦争の義 (訳文)」『國民之友』 (明治27年9月3日号) 『内村鑑三全集』3巻 (岩波書店，
9) 内村鑑三「時勢の観察」『國民之友』 (明治27年8月15日号) 『内村鑑三全集』3巻，p. 233.
10) 内村鑑三「世事が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』 (明治37年9月) 『内村鑑三全集』12巻 (岩波書店，
11) 内村鑑三「日本国と日本人」 (1899 (明治32)年10月) 『内村鑑三全集』7巻 (岩波書店，1982) p. 442.
12) 内村「日本国と日本人」，p. 442.
13) 内村鑑三 "How I Became a Christian." (本多訳訳)，『内村鑑三全集』3巻 (岩波書店，1982)，p. 90.
14) 内村鑑三「国民の根本問題」 『内村鑑三全集』16巻 (岩波書店，1982)，p. 44.
15) 内村鑑三「日本国の大困難」 (明治36年3月10日，聖書之研究35号『講演』) 『内村鑑三全集』11巻 (岩
波書店，1981)，p. 147.
16) 内村「日本国の大困難」 P. 150
内村鑑三：その预言者の侧面についての一考察

17）内村「日本国の大困難」P.155.
18）内村鑑三「日本人とキリスト」『内村鑑三全集』20巻（岩波書店，1982），p.276.
20）内村鑑三「我が理想のキリスト教」，p.178.
21）内村鑑三「我が理想のキリスト教」，p.180.
22）遠藤周作『合わない洋服』：何のために小説を書くか』「新潮」昭和42年12月号；『イエスの生涯』新潮文庫所収，p.227.
23）遠藤（昭和48年8月）『イエスの生涯』（新潮社，1972），p.225.
25）内村鑑三「失望と希望」，p.58.
26）内村鑑三「伝道の新紀元」『内村鑑三全集』17巻（岩波書店，1982），p.233.
27）内村鑑三「日本国の人傑」『内村鑑三全集』17巻，p.233.
29）内村鑑三「時事雑感」『内村鑑三全集』16巻（岩波書店，1982），p.43.
30）内村鑑三「信仰」『内村鑑三全集』21巻（岩波書店，1982），p.106.
32）内村鑑三「日本の基督教に就て」『内村鑑三全集』28巻（岩波書店，1983），p.32.
33）内村鑑三「日本の国体と基督教」『内村鑑三全集』27巻（岩波書店，1983），p.514.
35）McGrath, Christianity，p.260.

（論は東京大学大学院川中子義勝教授の2007年度後期ゼミでの発表をもとに拡大加筆したものである。
川中子教授に感謝したい。）